

## 東南アジア研究センターの図書室について

東南アジア研究センター

北野康子

去る2月14日に創立25周年の記念式典が行われた東南アジア研究センターの図書室は、その創立以来、他の国内研究機関ではまとまって見ることのできなかった、東南アジア地域研究の図書資料の収集を、研究活動の一環として積極的に推し進めてきた。洋図書44,960冊、和図書13,735冊、合計58,695冊（平成3年3月現在の登録数）、および、洋雑誌579種、和雑誌264種の雑誌と、その他の研究資料は、内装を新たにした旧京都織物会社の倉庫跡に所蔵されている。

### 〈資料の多様性〉

東南アジアに関する図書資料の特徴は、その言語と文字の多様性である。マレー半島およびミャンマーに関しては英語、インドネシアはオランダ語、インドシナ半島はフランス語、フィリピンはスペイン語と英語（米語）というように、植民地時代を通じた歴史を反映している。また、これらの地域で用いられる主な言語は、タイ語、ミャンマー語、インドネシア語、マレー語、ベトナム語、タガログ語等がある。これらのうち、タイ語とミャンマー語はローマ字以外の文字である。その他にもジャワ語、タミール語、アラビア語、中国語等の文字がある。

資料収集は、センターの研究支援のためのあらゆる主題を含むので、人文社会科学のみならず、科学技術の領域もカバーしている。資料形態も、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、および、別の建物に収容されている地図と航空写真がある。

### 〈現地語図書資料の収集と整理〉

昭和58（1983）年に「東南アジア現地語図書整備5年計画」が始まり、1億円の特別予算を得ることができた。現在は、その2期目が継続中である。この特別予算により、東南アジア諸語で書かれた図書の収集が開始された。現在までに目録カードも整備されて配架されているものとして、タイ語約2,900冊、インドネシア語（標準語以外も

含む）約2,800冊がある。その他に、コンピュータの冊子目録に含まれている約2,200冊分のベトナム語がある。ミャンマー語はそれ以前に寄贈されたものだが、約250冊ある。インドネシア語のマイクロフィッシュは、登録はされていないが、以前からの分も含めて約2,300ケースがある。

その他に二つの大きなコレクションを購入した。フィリピンに関するフォロンダ（Foronda）コレクションの7,000冊と、タイに関するチャラット（Charas）コレクションの9,000冊である。前者は、ルソン島北部のイロコス地方の歴史、文学、民族誌、宗教書等を含んでいる。後者は、葬式配布本（ナンスー・チェーク）と呼ばれるものが半数である。故人の記録や業績などを後世に伝えるという善行によって功德を得ようとして、葬式の出席者に配布するものであり、タイ研究者にとって貴重なコレクションである。共に冊子目録がある。

昭和61（1986）年より東南アジア諸語文献研究部門が増設され、東南アジアからカタログガーや、ビブリオグラファーを、外国人研究員として招聘することができるようになった。東南アジア諸語で書かれた図書は、わが国では和漢書でも洋書でもなく、その目録法は未開発の分野である。このほど彼らの協力により、タイ語とインドネシア語の図書の目録用のマニュアルが完成した。タイ語の図書については、センター独自のデータベースを構築しており、入力用のマニュアルも作成した。ローマ字化や、語の区切り、正書法など、その書誌データの入力には問題が多い。また、アングロサクソンの人名処理とは異なる東南アジアの人名の処理についても、東南アジア各国の国立図書館による標準化を期待する。インドネシア語に関しては、ほとんどがローマ字のデータなので、学術情報センターのネットワークの一員として入力するという責任を果たすことができるように努力し

なければならない。しかし、そのためのスタッフの数が十分でなく、余力が無いというのが現状である。

世界の学術研究機関や情報機関で生産される東南アジアに関する一次情報および二次情報の中で、東南アジア諸国自体で生産される情報が増加して

いることは意義深いことである。その情報のもつ多様性と問題点は、これらの情報の流通に関わっている、同じく非ローマ字の言語を母国語とする日本の図書館員の目が、アジアや東南アジアにももっと向けられることの必要性を主張しているのではあるまいか。

## 「自然科学系研究者の情報要求と利用に関する調査」の集計結果について

はじめに

本調査は、平成2年度末に附属図書館へ「電子ファイリングシステム」が導入されるにあたり、その後のサービス方法・形態を検討するための資料とすべく、実施された。

### 1 調査の概要

調査対象は、自然科学系で、吉田・宇治・熊取の3キャンパスに所属する研究者（教授、助教授、専任講師、助手）に限定した。

調査方法はアンケート方式とし、あらかじめ用意した回答から選択する方法と、自由記述回答とを併用した。

調査票の配布回収は各部局の図書室等を通して行い、平成3年1月22日配布、回収締切を2月8日とした。回収率は、2090部の配布に対して1473部の回答があり、70.5%となった。

### 2 集計結果

#### I 年齢・専門領域など

1（所属部局）：あなたの所属部局に該当する数字を次の表から選んで下さい。

回答項目	件数	%	回答項目	件数	%	回答項目	件数	%
1：理学部	162	11.0%	11：原エネ研	20	1.4%	21：放同セン	7	0.5%
2：医学部	103	7.0%	12：木材研	16	1.1%	22：ヘリ核セン	9	0.6%
3：附属病	86	5.8%	13：食糧研	22	1.5%	23：放生セン	8	0.5%
4：薬学部	43	2.9%	14：防災研	40	2.7%	24：環境セン	3	0.2%
5：工学部	435	29.5%	15：基礎研	13	0.9%	25：情報セン	3	0.2%
6：農学部	175	11.9%	16：ウィルス研	18	1.2%	26：超高セン	10	0.7%
7：演習林	6	0.4%	17：数理研	15	1.0%	27：遺伝子	2	0.1%
8：教養部	71	4.8%	18：原子炉	72	4.9%	28：生体セン	13	0.9%
9：化学研	72	4.9%	19：保健セン	2	0.1%	29：医療短	20	1.4%
10：胸部研	18	1.2%	20：大計セン	6	0.4%	30：保健診	3	0.2%

総合計 1473 100.0%